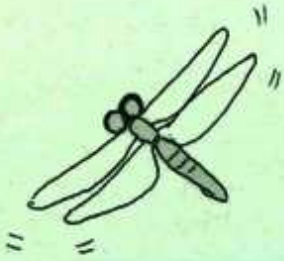


種子島の語り部「ぢろ（囲炉裏）の会」編

種子島の民話・遊び集

むかしあったちゅうわ

西之表市教育委員会発行

目次

はじめに　西之表市教育委員会　教育長　有島正之 …… 1

種子島の民話

一、濡れよめじょうの話 …… 2
①濡れ嫁女（国上） …… 2
②二つ川（住吉深川） …… 3
二、メンの話
①伊関のメンの話（伊関浜脇） …… 4
②サルシの坂・つりかけ（上西） …… 5
三、与次ヶ瀬（住吉） …… 5
四、甲女川どんと黒川どん …… 6
五、血染めの石（安城・立山） …… 8
六、ケシこいクロクチこい …… 8
七、身の片ひら（国上・伊関） …… 11
八、手水川（現和・安納） …… 13
九、古田御前の話（古田） …… 13
十、鍋割坂（中割） …… 14

十一．鳩ヶ瀬（榕城）……14
十二．岩立様（下西）……16
十三．弥五郎焚き（現和）……18

種子島の民話・わらべ歌

♪ようかい……22
♪こっちこい……23
♪まりつき歌……24
♪お手玉遊びの歌……26
♪鬼遊び歌　ほか……27
♪じゃんけんの歌……28
♪種子島廻り唱歌……29

私たちの年中行事……32

おわりに　種子島の語り部「ちろ（囲炉裏）の会」……36

はじめに

西之表市教育長　有島　正之

このたび、種子島の語り部「ちろ（囲炉裏）の会」の指導者のご尽力により冊子『むかし、あったちゅうわ』が刊行されましたことは、たいへん喜ばしいことであります。

それぞれのふるさとには、昔から伝わることばや風習、歌や踊りなど多くのものがあります。これらのものは、その土地の風土と深く関係し独特なもので他の地域にはないものです。そしてそれは、われわれの祖先によって長い間受け継がれてきたものです。

このように地域に残されてきた文化は、一度なくなると復活するのは非常に困難な運命にあります。

このようなことから、その地域に残る文化を後世に残していくことは大事なことであり、現在の私たちの責務であるとも言えます。

「ちろの会」が大事にしている方言も地域に伝わる大事な文化です。しかし昭和三十年代から四十年代にかけて、学校教育の中で標準語を話す指導がなされてきました。そして、「標準語は正しい、方言は悪い」といった教育がなされてきました。これは、当時の社会情勢と密接なかかわりがあり、すべて否定されるものではありませんが、その当時かなり方言から標準語化したものと思います。

今では、各地域の方言が見直され学校でもとりあげられるようになりました。

現在の世の中では、生活様式の変化や情報メディアの発達などであたらしい文化の吸収には敏感なものの、古いものが大切にされない風潮があり、昔から受け継いできたものが急激に喪失していっている感があります。

種子島の語り部「囲炉裏の会」では、このような種子島に伝わることばや風習、季節の行事などを大切にし、子どもたちに自分たちのふるさとの文化を伝えていく取り組みをされていますが、このことは現代の世の中でたいへん意義深いことだと思います。

この冊子の発刊にあたられました指導者の方々に感謝申し上げますとともに、この冊子が、これからの子どもたちが自分たちのふるさとを学ぶのによい参考書となることを期待いたします。

種子島の民話

一・濡れよめじょうの話

①濡れ嫁女（国上）

浦田の濡れよめじょうの話をし申そうかな。

浦田基地の下の山には、昔から「濡れよめじょう」が住んどるといわれとった。この濡れよめじょうは、いつも子どもを抱いて立っとって、濡れよめじょうに見つかると、

「子どもを抱あてくれえ」

とたのまれるちゅうわ。だから走って逃げるとが一番よかばって、もし頼まれたら子どもを抱あてやって、いっときしてから子どもの尻でもつもうで泣かすいとじゃちゅうわ。すると濡れよめじょうが子を取りい来て、

「褒美は何がよかか」

と聞かれたら、男なら「使いつぶしの筆」、女なら「欠けためしがー」と言えば、男は学者になり、女はちっとの米でも釜いっぱいに飯が炊けたちゅうわ。こがん力があるとじゃから、濡れよめじょうは幽霊じゃなしい、山の女神じゃなかろうかと言われとった。濡れよめじょうは髪の長か六、七才の女ん子じゃちゅう人もおるばって、近頃あ見たちゅう噂は聞かんなあなあ。

そこうさの昔や。

濡れよめじょう…女のお化け、妖怪　　めしがー…しゃもじ

②二つ川（深川）

深川の濡れよめじょうの話をし申そうかな。

深川と牧川の間に細か川が2本並んどるとこを、二つ川と言い申す。ここは、昔から恐ろしかところと言われとって、ガラッパや濡れよめじょうやメンが出るところやちゅう。

はあっと昔、まだ車なんどがなか時代、ある先生が、夜おそうなってから、一人で提灯と傘を持って、西之表の町から野間さなあ帰るところじゃったちゅう。周りは真っ暗で、灯りは自分でもっとる提灯だけ。そこあたりに家はまったくなか。海岸づたいにありいて、二つ川に着いた。そしたら、どこからともなく、きれいか嫁女が出てきて、

「先生、どけえ行くかい？」

といって、後からついてき申す。やっと、牧川まで来たとき、むこうの道ん くりに一軒、灯りのついた家がめえかかった。先生は、濡れよめじょうに、

「おいは、この家に用事があいから、いっときこけえ寄ってくいや。」

と言うたちゅう。濡れよめじょうは、

「いや、わごう、中に入ったら出てこんから、傘と提灯はおいが持っといから、いたてこいや。早ようもどってこいな」

と言うたちゅうわ。先生は、傘と提灯を濡れよめじょうにあずけて、家の中に入った。

先生は顔を真っ青にして、ガタガタ体の震えが止まらんじゃった。家の人もたまがって、

「先生、今日はこけえ泊まっておじゃり申せ。」

と言うてくれたちゅう。先生はぢろの火に当たり、体をぬくめとった。

いっときしたら、濡れよめじょうが外から、

「早よう来いやー。早よう出てこいやー。早ようもどろうや。」

とおろうどる。おそろしゅうなった先生は出て行かんじゃった。
いっときしたれば、提灯と傘をがりがりとかみ破るふっとか音がしたちゅう。そして濡れよめじょうがこう言うたちゅうわ。
「ちょうしもうた。あの二つ川で尻を抜けばよかったものう。」
あった話か、なかった話か、そごうさの昔や。

ガラッパ…かっぱ　メン…妖怪、化け物　たまがって…驚いて
ぢろ…囲炉裏　おろうどる…大声で叫んでいる

二、メンの話

①伊関のメンの話（伊関）

浜脇のメンの話をし申そうかな。
一人の男が夜中の十二時頃浜脇に差し掛かると、神官がかぶるような帽子をかぶった者が立っとる。あっちによけようとせえば、あっち行き、こっちによけようとせえばこっちに来るもんで通れんじゃったちゅうわ。隣の家で松明の火をもろうて灯りをつけたら、すうっと消えたちゅう。
伊関小学校のところも、ふっとか木があって寂しかところじゃった。人の形のようなものが立っとったり、砂をばらまいたりしたそうな。
そごうさの、昔や。

②サルシの坂・つりかけ（上西）

花里崎を過ぎて火立の峰に通じる急な坂を「サルシの坂」といい申す。南西＝申（サル）の風（シ）をまっぽうし受けるちゅう意味やちゅうわ。坂を登れば、昔津波があったとき鍋のつり（取り柄）がひっかかっとったことから、「つりかけ」と言われる大岩もあるそうじゃ。
この坂は、メンが出るちゅうことで恐れられとったちゅうわ。状持ち（郵便配達）が夜中に通ったら、ヨゴー松の川から人が出てきてうろうろしとったちゅう。そして「わごう、どけえ行くか。よろうて行こうわい。」と言うて、状持ちが急げば向こうも急ぎ、ゆっくり歩けばゆっくり歩いたちゅう。サルシの坂の切通しちゅうところで、状持ちが振り返ったれば、「ピカッ」と光ったちゅう。目一ツ五郎ちゅうメンやったちゅうわ。
そごうさの、昔や。

まっぽうし…真正面から　わごう…お前は　よろうて…一緒に

三、与次ケ瀬（住吉）

住吉の浦に与次ちゅう舟人がおった。ある時、与次は海のそこから一つの鐘を引き上げたちゅうわ。そりょう、みんな不思議そうに見とったちゅう。与次は「この海のそけえにゃあ、まひとつ鐘があらあ」と言うてまた海に潜って行ったちゅうわ。じゃばって与次は二度と姿を見すいこたぁはなかったちゅうわ。誰も「与次は、竜宮さなあいたけりゃあ」と噂したそうな。そいでこの瀬を与次ケ瀬と呼ぶごとなったちゅう。住吉灯台から海を眺めると、右手の沖いに見ゆる瀬で、昔はよう船が沈んだちゅうわ。
そごうさの昔や。

舟人…漁師

四・甲女川どんと黒川どん

甲女川どんと黒川どんの話をし申そうかな。

南種子の庄屋どんが、赤尾木城の殿様のところへ出かけたちゅうばって、用事が早よう済んだもんで、夜下り（夜行軍）を決めて、帰えりよったちゅうわ。三里もある長浜の半分にさしかかったころ、夕暮れにはまだ間があるとに、あたりは薄暗うなってきたちゅう。庄屋どんは気味の悪か気配がして、振り向いたちゅう。するとふっとか男が庄屋どんに付いて来よったちゅうわ。じゃばって、話相手の欲しかった庄屋どんは、その男に声をかけたちゅう。

「おまやあ、どけえ、おじゃり申すか。」

「わたしゃあ、平山あ行き申さあ。」

「平山にゃあ、何ごとでござり申すか。」

「わたしゃあ、浜田の黒川どんのとこれえ遊びい行きより申す。わたしゃあ、赤尾木の甲女川でござり申さあ。いつも黒川どんが来てくるるもんで、こんだあ、わしが行こうと、うったち申してな。よろうて行き申そうや。」

そこまで言うて、大男は、にたりと笑ろうたそうな。庄屋どんは心ん中で「しもうた！今夜でおいが命も終わりじゃける。夜下りしたのが運のつきじゃったけりゃあ」と半分あきらめ、どがんかして逃げんばとすきを伺うておったが、大男は庄屋にべったりとついてき申した。

この長浜というところは、塩焚き小屋が多くて夜通し塩を焚いとったちゅうわ。その小屋に助けを求めんばじゃと思うた庄屋どんは、

「朝から歩きどおしで、のどがかわあて、たまらんなあこら。ひょっとあの塩焚き小屋あいたて、水を飲んでくるから、ここで待っとってくれんか。」

こう、言うたばって大男は恐ろしか顔を横にふるばかりじゃった。

「そんならこの傘をおまええ、あずけておこうわい。この傘は、赤尾木の殿様から借りてきたもんで、おれの命よりも大切な傘でござり申さあ。」

と庄屋どんが言うと、甲女川はしぶしぶ庄屋どんの腕を離したちゅう。庄屋どんは、小屋の灯りを目指して、砂浜を一目散に走って、やっと小屋に着いて飛び込うだちゅうわ。小屋のじいさんはたまがって、

「どがんせられ申したか。」

と尋ねたちゅうわ。庄屋どんは、甲女川にとりつかれたいきさつを語ったちゅう。小屋のじいさんなあ、

「こけえは塩もある、火の神もおる、鉈もヨキもある。甲女川はこの小屋にゃあ、入ることはでけんから心配せんでよか。おまやぁこの塩かごのなかあ、隠れとれ。」

庄屋どんは、じいさんの言うごと塩かごの中ぁ隠れとったちゅうわ。甲女川は、小屋の周りをぶつぶつ言いながら重か足音をさせて回っておったちゅうわ。やがて小屋ががたがたと揺れ始めたちゅう。そして

「残念なことをした。お前を黒川どんの土産にしようと思うたものを。じゃが、いつか仇は討つー」

と割れ鐘のような声でおろうで、足音は遠ざかって行ったちゅうわ。庄屋どんは、この一晩で白髪になってしもうたそうな。

そごうさの昔や。

どけえ…どこに　　おじゃり申す…「行く」の尊敬語

五、血染めの石（安城・立山）

安城の血染めの石の話をし申そうかな。

四百年以上前、種子島を東西に二分して行う「島寄せ」ちゅう草相撲が西之表で行われとったちゅう。見物にいった安城の安姫は相撲の優勝者の河野又四郎と恋仲になったちゅうわ。又四郎は納曽の士族じゃったばって安姫に会いたい一心で、浜津脇の舟人の格好をして、たびたび安城にきとったちゅうわ。

それを知った安姫の父羽生右京は、安姫に身分が違こうことを諭したばって、安姫はそれを聞き入れようとはせんじゃった。右京は、しょうがなく、家来に安姫を殺すことを命じたちゅうわ。家来はその一部始終を右京に報告すると、そのなきがらを片付けるよう命じられたもんで、また万波にもどったちゅう。安姫はまだ生きとって、岩波瀬ちゅう谷川で傷を洗よったちゅう。家来は、命令どおり、安姫にとどめを刺して、なきがらを川のほとりに石を積んで葬ったちゅうわ。右京は、帰ってきた家来の報告を聞いて、

「生きておったならば、よーっとしておけばよかったものを」と泣いたちゅう。

また、この話を聞いた又四郎は安姫の死を悲観して、万波の思い出の場所で死んだちゅう。そのなきがらは重うして動かしいならんじゃったけど、安城の方を向けたら軽々と持ち上がったちゅう。安姫が切り殺された場所は、安姫の血で染まったかのように川石が赤くなっとるそうな。

六、ケシこい　クロクチこい

むかし　むかし　猟師がケシちゅう名の犬とクロクチちゅう犬を二匹連れて、狩りに行き申したそうな。その日は、ぶんと獲物が捕れんじい、深山の谷をあっちこっち駆け廻っておるうちい、シダの草が一面に生っとる場所へ出てしもたそうな。　二匹の犬も、せしい喜こんでもらおうとちりじりいなって、いっぱあこっぱあ獲物を探して走りまわっておるうちい、主人やあ犬を見失のうてしまい申したちゅうわ。

「ケシこーい、クロクチこーい。」

もう周辺は夕もやがたって足元も暗うなって来申したそうな。

「ケシこーい　クロクチこーい。」

深山の静けさを破る必死の呼び声も、何の返答もあり申さんじゃったそうな。その頃はなあ、猟師はみんな、山に入る時は足なかちゅう特別なわらぞうりを履いており申したちゅうわ。そのぞうりを目印にええて、そのかたわらあ、木の枝を折って立てて、明日また来うと思うて、その場を離れ、一晩中、山をさまよい歩いて、やっとのことで家に辿り着き申したそうな。そいから、二、三日待っても、犬はとうとう帰って来申さんじゃったちゅうわ。　心配で心配で人を何人も雇うて山へいたて、「ケシこーい、クロクチこーい」ちゅうて声を限りい、呼んで見申したちゅうばって、やっぱい、見つからんじゃったちゅうわ。とうとう、しかたなしい、二匹の犬を探すことを諦め申したそうな。そいでも、猟師は二匹の犬を忘れることができんでなあ、時々、一人で山あ来ては

「ケシこい、クロクチこい」ちゅうて、探しており申したちゅうわなあ。新緑の山々の景色も、いつん間にか、赤や黄色に変わって、やがて、寒か冬がやってき申したちゅうわ。その日も猟師は狩りに夢中になっとるうちい、見慣れん場所に迷い込んでしまい申したちゅうわ。　あたりをよく見ると、そこは前に二匹の犬を見失なった場所じゃった。猟師はもしかと思うて、あたりの草むらをかき分けて、あの時、立てておった木の枝を探し始め申したちゅうわ。　ところが、目の前に一刻も忘れたことのなか、あの枝が立っておったちゅうわ。　思わず駆け寄った猟師はそこに、立ちすくんでしまい申したそうな。猟師の足元には、哀れなケシとクロクチの死骸が口にぎゃんとわら草履をくわえたまま横たわっており申したちゅうわ。

猟師は涙をボロボロこぼして、

「ケシよう、すまんじゃったなあ。クロクチよう、すまんじゃったなあ」

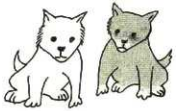
「あようまあ、ごおらしなげえ」

猟師は誰も居らん奥山で、思いきり声を張り上げて、泣き申したちゅうわ。そして、泣く泣く、ていねいに葬って上げ申した。あまりの悲しみで、猟師はやがて寝込んでしまい、とうとうこの世を去り申したちゅうわ。ところが、猟師の死後、今まで見たこともなか鳥が、姿を見せるようになり、夜になると、深山の方から「ケシこい、クロクチこい」と身にしみるようなさびしか鳴き声がするようになったちゅうわ。村人たちは、あの鳥は猟師の魂が乗り移ったものじゃあと信じるようになったそうな。そして、その鳥の名を「ケシコ」というようになったのじゃそうな。ケシコは夕暮れになると、草履を置いてあった奥山から村里へ飛んで来て、「ケシこい、クロクチこい、ケシこい、クロクチこい」と一晩中鳴いて、夜明けとともに奥山に帰って行ったそうな。　こういうわけで、今でも猟師は草履を山に置いて帰ってはいけないといわれておるのじゃそうな。

ぶんと…いっこうに　　せしい…主人に　　いっぱあこっぱあ…あっちこっち

ええて…置いて　　ぎゃんど…しっかり　　あようまあ…なんとまあ

ごおらしなげえ…かわいそうに　　ケシコ…ふくろう



七、身の片ひら（国上・伊関）

「身の片ひら」の話をし申そうかな。

種子島の北の方に奥という集落がござり申す。ここ辺はずっと丘になっとって、椎の木やまての木、黒松などの森がうっそうと繁っており申した。昔、ここは種子島家の殿様の狩り場になっており申した。奥集落には、古い神様がおり申して、狩の時はこの神様に祈る習わしでござり申した。

さて、殿様がここに狩に来られ申したときのことでござり申す。犬使いが五十匹の犬を使こうて、あっちの峰こっちの峰から鹿を追い出しにかかったちゅうわ。家来は、鹿の通おり道のまぶしという木の枝や笹で作った隠れ場所に隠れて、鉄砲を構えとったちゅうわ。じゃばって、鹿は一匹も出てこんかった。こがん時、血祭りというて、血のしたたるニワトリを山の神様に供えて「どうか鹿をとらせてたもうれ」と祈ったちゅう。

じゃばって、その次の日もそのまた次の日もとれんじい、とうとう七日たってしもうたそうな。殿様は、はいかあて、

「犬使あはだれか。あしたあ、もう一度やってみて、もしとれんじゃったら、犬使あは切腹せえ」

と、厳びしく言うたちゅう。犬使あは、

「なしかあかなあ、かねては何匹もとるっとに、おかしかことがあるもんじゃなあ。よし、今夜もう一度神様に願こうてみるほかはなか」

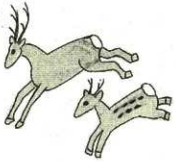
犬使あは、山の神にあげる潮を汲みい、真夜中、伊関の浜に行ったちゅうわ。竹筒に潮水を汲んでの帰り道、柳原のふとか松の木の根元で一休みしたところ、そのまま寝入ってしもうたちゅうわ。どんくらい経ったとか、まわりが騒がしいので犬使あは目を覚ましたところ、奥の山の神様と伊関の山の神様が、ふっとか声で相談しよったちゅう。

「おーい、あしたあは、鹿を七匹と身の片ひらを出そう。」

「よーし、そがあにせんばじゃろうな、ごうらしなげえ。」

それを聞いた犬使あは、急いで殿様のとこれえ行き、
「殿様、あしたこさあ、必ず鹿を七匹と身の片ひらをとってみせ申す。」
と言い切ったちゅうわ。
次の日、最後の狩りがはじまり申した。犬使あも家来たちも、本当に七匹と身の片ひらがとれるかどうか、心配でたまらんじゃった。朝のうちいにびたりと七匹は揃うたばって、片ひらが取れん。殿様は
「おまえは、ゆうべは七匹と身の片ひらをとってみすると立派なことを言うたが、身の片ひらはとれんじゃあなっか。さあ、腹を切れ」
犬使あも家来たちも真っ青になり、すっかり困ってしもうたその時、
「鹿がとれたろう。」
という声がしたちゅうわ。犬が食い殺したと見え、頭ばちぎれて胴体だけの鹿じゃったちゅう。犬使あは
「殿様、あれが身の片ひらでござり申す。」
「なるほど、そうか、たしかに七匹と身の片ひらじゃ。みごとじゃ、喜右衛門。おまやあ、これから田も畑も作り放題じゃ。上納はいらん。今日とれた鹿七匹と身の片ひらは、全部国上村へつかわすぞ。」
と言うたちゅう。伊関のこの犬使あの家では、地租改正まで、上納なしに田畑を作ったちゅうわ。
そごうさの昔よ。

はいかあて…腹を立てて



八．手水川（現和・安納）

ある日なあ、現和と安納の両方の庄屋が日を決めて、朝早う両方から歩いていたて会うたところを現和と安納の境界にしょうちゅうて約束したちゅう。約束したその日、現和の庄屋はいつもより早う起きて、顔を洗ろう暇も惜しんで、安納に急いだちゅう。じゃばって、安納の庄屋の姿は、いっこうに見えん。そうこうしょうるうちい、とうとう安納のすぐそこまで来てしもうた。するとそこの川で顔を洗ろうとる人がおった。それは、安納の庄屋やったちゅう。約束通り、その川から南は現和、北を安納としたちゅうわ。それ以来、安納の庄屋が顔を洗ろうとった川を手水川というそうな。
そごうさの昔よ。

九．古田御前の話（古田）

古田御前ちゅう方は、黒木道純の娘で鉄砲伝来の時の第十四代時堯公の側室で、「鉄砲記」を著した第十六代久時公の母上でござり申す。天正十七年（一五八九）に四十二歳でお亡くなりになり申した。
時堯公との馴れ初めにこんな話がござり申す。時堯公が国上村で鹿狩りをしたときの話。時堯公は水が欲しくなり人家に立ち寄ったところ、そこに娘がおって、さっそく天目を鍋のふたに載せて差し出したちゅう。はじめの一杯はぬるか茶を、次は少し熱めの茶を、最後に熱か茶を差し出したちゅう。時堯公は、すっかり感心して、その娘を館に招いた。その娘が古田御前でござり申す。二人の間に生まれた克時（後の久時公）を島主の館で育てえば、ひ弱な子になると思うた古田御前は、種子島で一番寒か古田を選び、母子で移り住み、克時の心身を鍛え、武芸の修練に励ましたちゅうわ。時堯公は、秀吉の朝鮮出兵の時、島津の一翼として大変活躍をされ申した。この武勇に優れた殿様を育てた古田御前は、良妻賢母としてたたえられ種子島の偉人の一人でござり申す。

十．鍋割坂（中割）

古田から中割の万波に通ずる山間のくねくね曲がった坂道を行くと、鍋割坂という坂がございり申す。

昔、山に住んどった男が町い行たて、買うた鍋を背負うて、もどりよった。わざわいか急な坂じゃったもんで、その坂を上るたびい、紐が緩うて背中の鍋が落ちて、とうとう鍋を割ってしもうた。そいから鍋割坂というようになったちゅうわ。

そごうさの昔よ。

わざわいか……ものすごく

十一．鳩ケ瀬（榕城）

これから「鳩ケ瀬」の話をし申そうかな。

今から四百五十年くらい前のこと。赤尾木の港に見慣れん、ふとおか船が来たそうな。

赤尾木の港は大昔から日本と唐の国を結ぶ船の中継ぎの港としてわざい大事な港じゃったちゅうわ。赤尾木の人たちゃあ、唐の国の船は時ん見ったから慣れとったが、今度の船は今まで見たこともなか船じゃったちゅうわ。

すると急に沖の船から雷のごたる響きがして海岸の石垣が土けむりをあげてふっくえたちゅうわ。

赤尾木の城内では、急に大騒ぎいなり、庭にゃあ侍たちが詰め掛けて、城内じゃあ殿様を中心に、作戦会議が始まったちゅう。この恐ろしか石火矢を持った海賊船に勝つよか案も作戦も浮かばんかったそうな。

その間も沖の船からは、ごうごうと石火矢が打ち込まれたちゅう。

よか作戦なあ浮かばんじい、みんな黙りこうでしもうたその時、登城して来たのは、殿様の弟の日源上人じゃったそうな。

上人は、島の仏教の総本山にあたる慈遠寺の住職じゃったちゅう。

上人は、殿様に向こうて、

「これは種子島初めての事でござり申す。船は唐の国よりもまだ南のほうにある異国の海賊船と思われ申すが、武力では勝ち目はなかと思い申す。この上はただ神仏のお力におすがりする他はなかと思い申す。どうか私い賊船退散の加持を許しておくじゃり申せ」

と、お願いし申した。

「効き目がなか時は・・・」

と殿様が真剣に聞けば、

「その時にゃ、私みずから賊船に火をつけ申そう」

と、日源上人はきっぱりと答え申した。

赤尾木城の港の正面にある慈遠寺では、さっそく護摩の火が焚かれ、祈祷が始まり申した。そうして何時間かたち申した。港はだんだん日が暮れて、慈遠寺の護摩の火が一段と煙を上げたので、賊船のよか目印になったのか、一発の石火矢が、声高くお経をあげておられた上人の体をその場に打ちひしいでしもうたそうな。

そばにおった人たちが、はっと声をのうだその時、慈遠寺の北側の丘にある八幡神社の鳩が、ばたばたと降りてきたと思うたら、護摩の火をくわえて、高こう舞い上がり申したそうな。

そして、いっとき港の瀬え羽を休めており申したが、やがて飛び立つと、矢のごと沖の海賊船めがけて飛おで行き申した。人々は息をすっとも忘れて、鳩の姿を見守っており申した。その時、急に真っ赤な火柱が海賊船から立ち上がり、続いてものすごい音が島を揺るがし申した。そいから人々が目を開けたとき、沖にはもう海賊船の姿はござり申さんじゃった。

それから、鳩が羽を休めた瀬を「鳩ヶ瀬」というようになり申したそうな。
そごうさの昔や。

十二、岩立様（下西）

これから「河太郎の日魚」の話をし申そうかな。
西之表の甲女川は、種子島では一番ふっとか川で、橋がふたつかかっておってな。河口に近かほうが天神橋で、その上さなあ四百メートルばかり行ったとこれえあっとが、かもめ橋でござり申す。そのかもめ橋のあたりで、川は北にぐるっと曲がって深か淵になって、水はあおりんあおりん、よどんでおり申した。この西側にちいっかわら小屋を作って甚吉じいさんが、ひとりで住んでおらったちゅうわ。

ある年、大雨が降り続いて、とうとう甲女川も水が溢れだあて、あたりの田畑は水浸しになってしまい申したちゅうわ。
その大雨の中をば、甚吉じいさんのわら小屋へ、河太郎が訪ねてきて言うことにゃあ、
「じい！この大雨でおいが穴の口にゃあないかひっつまって、出も入りもでけんとよ。頼むから、どうかして助けてくれえよ。」
というて、頼み申す。じゃばって、せっかく頼まれても、この大水じゃあ、いかな甚吉じいさんもどがんすることもでけんじゃったそうな。
それからちゅうもんは、毎晩のように河太郎が出てきちゃあ、
「甚吉じいさん、なんとかしてくれえよ。」

ちゅうて、せめたてられてどうにも断わりきれんごとなった甚吉じいさんは、
「おじゃあ、今はそがんゆうて頼むばって、おれをもぐらせておいて、しんごを抜くつもりじゃろうが、その手えなんでのるもんかよ。」
とっぱねたちゅうわ。
ところが河太郎は両手をついて涙をながあて、何度も何度も頼うだちゅうわ。
「そがあなことは、絶対せんから。どうか取ってくれ。」
という顔は、甚吉じいさんにもうそではないと思えてきて、
「よし、そいじゃあ取っくれようわい」
と、甚吉じいさんは、とうとう引き受けてしもうたちゅうわ。
それでも念のため、甚吉じいさんは、ふんどしの下に石を入れてぎゃんと締め付け、万が一にもしんごを抜かれんように用心しながらもぐってみると、穴んロにゃあ、モーガがはまっとった。甚吉じいさんは、やっとのことで、それを取って除けたちゅうわ。
河太郎はわざわいかよろこうで、
「おぜのかげえ、元通り出入りができるようになり申した。このお礼に、おぜにゃあ、毎朝、日魚を生け捕ってきてやるからな。じゃばって、ぜったいに人に言うちゃあいけんど。」
と、念を押して、川の中にザブンと飛び込んでしもうたちゅうわ。
それからちゅうもなあ、毎朝、わら小屋の壁にや、ふっとか魚が一匹ずつかけてあり申したちゅう。
甚吉じいさんは、うれしゅうしてたまらんじい、つい、人にそのことをしゃべってしもうたちゅうわ。それっきり魚は壁にかけられることはなかったそうな。

そいでも、これは約束を破った自分が悪かるとじゃから、すまんことをしたなあちゅうて、甚吉じいさんは、丘の上に石を立てて河太郎をまつり、水天宮として大切に大切に守ったちゅうわ。

この石は今もあって、昔は近所の人が六月灯のまつりをしていたそうな。また河太郎にあやかれば、相撲が強くなるちゅうことで、慈遠寺の相撲のときは、島の力士たちが来て力足を踏んで勝利を祈ったということで、ござり申す。

そごうさのおかしや。

十三、弥五郎焚き（現和）

これから「弥五郎焚き」の話をし申そうかな。

今から二百四十年ばかり前、種子島の東海岸、庄司浦というところにあった話でござり申す。

この浦は、大昔、荘園の役人であった荘司が、ここから船を出したことから庄司浦と名がついたとか、とにかく昔から大切な港であったようでござり申す。

この海沿いの緑の中に、白い道がうねって続いており、庄司浦の家々はこの道をそうで並んでおり申した。その真ん中付近に島にはめずらしかふっとかツツジの木があって、その前に小さな祠が建っており申した。弥五郎神社とも呼ばれるとおり、ここが孝子弥五郎の生まれたところでござり申す。

弥五郎は舟人でござり申した。幼いころ、父を亡くし漁をしながら母と二人で暮らしておったが、わざいか親孝行者じゃと評判が高かもんじゃから、現和の庄屋どんが、種子島の殿様に知らせ上げ申した。

殿様は、評判どおりの親孝行者かどうか、家来を遣わしてそれをたしかめることにし申した。

家来たちはさっそく、庄司浦に行き弥五郎の家をこっそりのぞいており申した。島にはめずらしかあられの降るひやか晩じゃったが、家来たちは殿様の命令とあって、しかたなくじいっときばって弥五郎のすることを見ており申した。家の中には、薄かむしろが敷いているだけじゃったが、ちろには火がどんどん燃えており申した。弥五郎は貧乏じゃったから、家具らしいものはひとつもござり申さん。ちろの向こう側に薄か布団が一枚敷いてあるだけじゃった。

「おっかん、肩をもんでくりょうかい。」

「わあも、だれとるじゃろうから。」

「んにゃ、そがん、だれちゃおらんなや。」

「いつも、おおきになあ。」

「おっかん、今日はなあ、わざいか太っとか魚が網を破って逃げてよ。」

「そりゃあ、また、あったらしかことをしたなあ。」

弥五郎は、いつも、海での出来事や近所であったことなどを母が寝つくまで話してやるのじゃった。

しばらくして弥五郎は、さっさと布団にもぐりこおでしもうた。布団はたったひとつしかなかったから、それを見ておった家来たちは、

「年取ったおっかんをうっちぇえて、自分先い寝てしもうとうあら。ないが親孝行者かよ。こいこさあ、一番の親不幸もんじゃ。」

「さあて、年をとったおっかんな、どがあして寝るもんじゃろうか。」

と、もういっとき、様子を見ることにし申した。いっときすると、弥五郎は布団を出て、

「おっかん、布団がぬくもおったろ。今夜、わざいかひやか晩じゃから、早よう寝てくれえ。」

と言いながら、おっかんを抱さかかえるようにして布団に寝かせ、自分はぢろにどんどんたきもんをくべて、ごろんと横になって寝てしまい申した。

「なるほど、評判どおりじゃけりゃあ。」

一部始終を見ておった家来たちは、すっかり感じ入り申した。

家来たちが赤尾木にもどって、見てきた通りを殿様に申し上げ申すと、殿様はたいそう感心されて、弥五郎にたくさんのほうびをくださり申した。

それから、種子島では、ぢろに火をどんどん焚くことを「弥五郎焚き」というようになったそうでござり申す。

弥五郎が仕事に出るときは、おっかんも、

「おいも網のつくろいぐらいはでくっから、いっしょに連れていたてくれえや。」

と頼うだが、弥五郎は笑いながら、

「いやあ、今日はなあ、おっかん。ツツジが満開じゃから、ちょうちょうが何匹ばかし来るもんか、数えておいてくれえや。」

と言うて、おっかんには花見をさせておくのでござり申した。

弥五郎には、袈裟という娘がおって、一里ばかりはなれた田の脇に嫁いでおり申したが、この袈裟がまた、父の弥五郎に負けないくらいの親孝行でござり申した。嫁いでからも、毎朝暗かうちに庄司浦まできて、父や祖母のために朝水を汲んでおいてくれたそうでござり申す。

袈裟は、家の仕事が一段落すると、また実家へ出かけていった。

「お婆、何をしょうたとや。お茶でもいりょうかい。」

と、声をかけると、

「うん、そがんしてくるっか。おおきになあ。」

のどが渇いていたのか、祖母はしばらくものも言わず、おいしそうにお茶をするのじゃった。袈裟は、時の許す限り祖母の相手をし申したそうな。

「おまえが、毎日来てくるったあ、うれしかばって、無理して来んことなあ。」

と気遣う祖母に、父の植えたツツジの木を指して、

「このツツジに、何匹のちょうちょうが飛んで来んろうかい。明日はおいが来るまで数えておけや。」

と、優しく言い残して田の脇の家へと急ぐのでござり申した。

弥五郎の庭先のツツジの木は、今日も、美しく咲きほこり、どこからともなく飛んできたちょうが、老いた母を見守るかのように戯れているそうでござり申す。

このように親子そろって親孝行だったので、明和五年には、二人とも太守島津公からお褒めほの言葉をいただいたということでござり申す。

種子島の民謡・わらべ歌

『ようかい』

一　ようかい　ようかい　ようかいよ
よっと　この子が　寝たならば
息を　ほしと　しょうものば
ようかい　ようかい　ようかいよ

二　おぜが　ととさま　どけいたか
あれは　屋久島　かま売りに
ようかい　ようかい　ようかいよ

三　かまは売れぬか　まだじゃろか
二年たっても　まだ　わせぬ
ようかい　ようかい　ようかいよ

四　三年たっても　まだ　わせぬ
三年三月に　状が　来た
ようかい　ようかい　ようかいよ

『こっちこい』

一　おっかんよ　思わんかよ　おら寝た間にも
波の引く間も　忘りゃせんど　こっちこい

二　波のひく間も　忘れてなろか
五年このかた　抱いて寝とう　こっちこい

三　行たてくるから　身を大切に
荒い波にも　あわぬごと　こっちこい

四　忘りゃせねども　月日がたてば
次第しだいにうすくなる　こっちこい

五　雨の降る日と　日ぐらしもとに
生まれ在所を　思い出す　こっちこい

六　生まれ在所の　同志こそよかよ
かける言葉も　しおらしこう　こっちこい

『まりつき歌』

♪竹ん子すみそ
一銭がと三つ
まけて四つ
チョーイヨ

♪きーらいな　きーらいな
一万一千一百石一斗一升一合まで
おくらに納めて
二モンメにわーたーせ（二人目に毬を渡す）
（二人目の人は）
二万二千二百石二斗二升二合まで
おくらに納めて
三モンメにわたせ（三人目に毬を渡す）
（数を増やして続く）

※まりのことをギッタとか、ギッタまりと言っていた。

♪坊さん坊さん
坊さん　坊さん　なぜ泣くの
親もおらずに子もおらず
たった一人の坊さんが
山から転んで血を出して
人が来たときゃー
チョイと隠せ

♪わたしゃ田舎の　げんち唐芋
コッパに切られてたたかれて
石の車に乗せられてー
田子になった時や
んまかーれ

『お手玉遊びの歌』

♪

一、お一つおろして　オーサーライ
二、お二つおろして　オーサーライ
三、おてしゃみおてしゃみ　オーサーライ
四、おつかみおつかみ　オーサーライ
五、おちりんこおちりんこ　オーサーライ
六、おひだりおひだりおーひだり
　中とって、つまよせ　さあらいて
　塩つけやっちょめ　やっちょめ　オーサーライ
七、おうてんぶしおうてんぶし　ぶうしー　オーサーライ
八、おうんばさみ　おんばさみ　さみさみ　オーサーライ
九、ちんこんはーし、こぐれ　こうぐった　オーサーライ
十、大はしこぐれ　こうぐった　オーサーライ
十一、おうひじ　おうひじ　オーサーライ
十二、ひいるひるひるオーサーライ
十三、お一つやのぶっつらけ
十四、も一つおまけのぶっつらけ　やっとこどっこい　おれこれさ

『鬼遊び歌』

♪ひーとりふーたり三べら子
　よってたかって　ひとつかみ
　あとは誰が数えるか
　あの人さーん　この人さん

『へなこ』

♪へなこ　へなこ　誰が屁をひったか
　ひった人にうち向ける

『言い出しべ』

♪言い出しべから三番目
　ブッとひって　ブッとひって　ブッ　ブッ　ブッ

『アーケー取りの唄（トンボ）』

♪アーケンコー　出えて来おい（出てきたら）
アーケンコー　とまり申うせ
菜種の葉をくわすいから　とまり申うせ

『じゃんけんの歌』

♪せっせっせの　よいよいよい
一かけ　二かけて　三かけて　四かけて　五かけて　橋をかけ
橋の欄干　手をこしに　遥か向こうを　眺むれば
十七、八の　姉さんが　花と線香　手に持って
もしもし　姉さん　どこへゆく
私は　九州　鹿児島の
西郷隆盛　娘です
明治十年三月に　切腹なされた　父上の
お墓参りに　参ります
お墓の前で　手を合わせ　なむしゃむ　かむしゃむ
じゃんけんぽん

♪せっせっせの　よいよいよい
お寺の　花子さんが
かぼちゃの種を　まきました
芽が出て　ふくらんで
花がさいて　実になって
お寺の　花子さん　（じゃんけんぽん）

♪　種子島廻り唱歌

明治四十四年八月　　作詞　八板正二

一．太平洋に浮かび出て　北より南に細長き　名も栄え行く種子島　いざ諸共に廻り見ん
二．草鞋脚絆に杖一つ　西之表を立ち出づる　榕城校につく鐘は　午前八時を知らせたり
三．甲女川なる天神の　橋を渡れば城之浜　針の物いう電信の　陸揚げ場所とはことかや
四．皇碑に伝える安徳の　帝をしのび給いたる　澄泊なる王之山　宮居遥かに伏し拝み
五．程なく通る石寺は　栖林公のその昔　玉のようなる唐芋を　植え初め給いし所なり
六．海上遥かに見渡せば　馬毛の眺めも能野浜　世も治まりて住吉の　墓之江神社に詣でつつ
七．左に深川牧川の　鶏の声をば耳にして　西海岸の半ばなる　浜津脇にてひるげする
八．磯打つ波も荒崎の　流れも清き滝の水　掬いて暑さ忘るるぞ　夏の旅路の恵みなる
九．名にし負うたる長浜は　見る目遥けき　汐干潟　長汀曲浦の人の影　鳥かとばかりまがいけり

十．浜の中なる阿高磯　ここには屋久と我が島と　鼻と鼻とのつき合わせ　睦び語らんばかりなり

一一．屋久津梶潟うち過ぎて　通るは磯の道伝い　稲子泊の貫門に　過ぎし昔の事問わん

一二．久時公の御代とかや　朝鮮入りの功にて　許しを受けて立てし門　ふりたる柱に名をとどむ

一三．やがて見ゆる島間崎　海上通かに突き出て　前は名に負う荒崎の　流るる潮は矢の如し

一四．昔領主の米倉は　町外れとこそ聞きつれど　その後今は荒れ果てて　くさむら高く虫ぞ鳴く

一五．一里離れて上中の　闇ゴザはここの名産ぞ　放ちし牛馬の走り野は　草ぼうぼうの牧場なり

一六．立切谷もうち越して　早や西之にぞ着きにける　門倉崎は島の端　南は海原果てもなし

一七．世上に轟く鉄砲の　術を伝えしポルトガル　その商船の漂着は　前の浜なる小浦とぞ

一八．浜の山なる松が枝も　吹く潮風に琴弾きて　島の名誉と島の名を　千代に八千代に唄うらん

一九．西海岸はここに尽き　今は東に廻り来ぬ　旅の無難を下中の　真所神社に祈るなり

二十．茎永村に名高きは　宝満池と田面にて　秋は稲穂の波をうち　冬は水鳥夢さむし

二一．沖の小島の絶景に　風の岩屋の風色を　見つつ釣りするあまが子は　世のうきふりも忘れたり

二二．程なく超ゆる上里の　名だたる柑橘見ておかん　峰から峰の岩つつじ　手折りつつ行く平山の

二三．名ある岩屋に立ち寄れば　海の見る目も面白し　坂井の里を三熊野の　浦半の景色えもいわず

二四．ここに崇める御社は　霊験灼然なりとかや　前は松原うち続き　後ろは峨々たる山高し

二五．潮満ちくれば池をなし　引けばたちまち潟となり　老若渚に下り立ちて　蛤捕りや貝拾い

二六．春はのどけき桜狩り　夏は涼しき船遊び　松涛庵の秋の月　四時の眺めも都なる

二七．名所名所に比べても　かかる景色は多からじ　名残を後に辿り行く　田島の里もうち過ぎて

二八．野間を通りて中山の　千草の原とはここかや　古くはそのかみ中山の　百姓一揆の古戦場

二九．松風寒き夕間暮れ　島のみねぐらに帰るなり　左手に納官立ち寄らず　行けば程なく増田なり

三十．真楯の岩屋も珍しく　温泉場さえ開けたり　海だに見えぬ深山路の　霜いと深き古田こそ

三一．孟母と世にも歌われし　古田御前の遺跡なれ　東に廻りて安城の　立山という漁村には

三二．アメリカ人の漂着し　救助の報いに五千円　米国政府の送りしを　忘れじとての記念碑を

三三．安城校に立てらるる　相互の信義ぞ有難き　芦野の牧の牛馬は　世に珍しきものながら

三四．名のみのころて種は絶え　今は牧場も荒れにけり　現和を通りて安納の　天女隠れの御神に

三五．遥か雲井に伏し拝み　伊関の里に杖とめて　読む石文は立山と　同じ船なる乗り組みを

三六．救いあげにしいわれにて　記念の為とぞ知られたる　囚人つなぐ監獄を　道の左にうち見やり

三七．廻り廻りて北の端に　国上にこそ着きにけれ　いでや照覧浦田なる　神の社はふりたれど

三八．あかぬ眺めに憧れて　旅の思いをもらしけれ　これより南に帰り路の　心の駒も勇まれて

三九．つづら折なるサルシ坂　下ればやがて花里の里　願う心も五十鈴川　伊勢の神宮に参詣し

四十．八町花里浜七川を　越えて嬉しく帰り来る　三十八里の道程を　廻るもわずか五・六日

四一．洲之崎松も色添えて　無事の帰りを迎えけり　近き所を先にして　遠きを知るは地理の学

四二．灯台もとを暗くすな　いざ見て廻れ我が子らよ　灯台もとを暗くすな　いざ見て廻れ我が子らよ

私たちの年中行事

私たちが生活するなかで、正月やお盆、秋の祭りなどの季節になると、必ず各家や集落で行っていることがあります。これは私たちのご先祖さまが、神様に感謝しながら農業や漁業を営み、生活をしていくための知恵と種子島独自の風習を守り続けてきたことが、現在にも残っているためです。しかしながら現在は生活が便利になり、人口が減ってきているため、昔の行事やしきたりが省略されています。これは、種子島独自の文化がなくなっていくことを意味しており、非常に残念なことです。ここでは、毎年同じ季節に同じ方法で行われる「年中行事」を取り上げ、私たちのご先祖さまが伝え続けてきた種子島の民俗文化をご紹介したいと思います。

【門木迎え】

十二月三十日・三十一日に穢れのない山へ行き、松・マテ・くぬぎ・竹などの門木をもらい、それを山ビワの割り木三本か五本で根元を囲み、縄で巻きしめます。門の両側に立て、白砂を盛ります。

【注連縄】

注連縄には、ユズリハ、モロバ、ダイダイ、紙に包んだ木炭をくくりつけます。

種子島家の注連縄は「鶴の巣ごもり」と言われる独特なものです。注連縄の下に茅で編んだかごを付けています。これは、初代信基が野宿をした際、その頭上に鶴が巣を作ったため雨露をしのぎ快適に過ごせたことから作られるようになったそうです。ダイダイが落ちることのないよう、正月に「落ちる」ことを極端に嫌い縁起をかついだことからきていると思われます。

【若水迎え】

元旦の朝、一番鶏の声とともに、戸主が泉や井戸に行き、御洗米・焼酎を供えて若水を汲みます。神様への水、お茶、炊飯にも若水を使います。顔を洗うときも白米四・五粒を入れて若水を使いました。

【白起し】

二日、一番鶏の声で開始します。集落の青年たちが数人で組を作り、各家を回って「祝い申そう」と声をかけ、お供えの米を白に入れ、祝い唄を唱えながら米をつく真似をし、豊作を祝い、餅をもらって帰ります。

【船祝い】

二日の早朝、漁業を行う集落（浦）では、漁業を行う人たちが集まり、浜へ出かけます。船主が船霊様へ焼酎、米、餅、塩、刺身、赤飯などを供え、御神酒が済むと大漁旗で飾られた船に乗り、つなざらえの歌を歌い、浦の船を祝います。

【七草】

七日、七歳になった子どもたちの家では、親戚など七軒の家から七草雑炊をもらい、これを食べることによって、子どもたちが健康で幸せに育つようにと祝います。（七草・・・せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ）

【帯解き】
七日、七歳になった子どもは母親と一緒に名付け親・養い親のところに行き、着物のつけひもを切り取り、新しい正式な帯を巻いてもらう儀式です。

【くさいもん（福祭文）】
七日の晩、集落の青年や子どもたちが正月の神にかわって各家を訪れ、門口から福祭文（くさいもん）を唱和して、その家の幸福と繁栄を祈って祝います。帰りには、お年玉として祝いの餅や果物、お菓子などをもらいます。

【コノミヤジョウ】
十四、十五日の小正月に、蚕の繭に似せた切り餅を柳やコヤスギの小枝にさし、門木や家の中の柱などに飾って蚕の豊作を祝います。子どもたちは、このみやじょうの歌を歌い、門ごとに祝ってコノミヤジョウをもらいます。

【養い親・名付け親】
子どもが元気に成長することを願い、信頼できる人望のある人に頼んで、名付け親・養い親になってもらいました。本名とは別に名前をつけてもらい、その子が成長しても、七草など節目には挨拶に行き交流を続けました。

【精霊迎え・精霊送り】
八月十四日未明、御洗米、酒、線香、ろうそくなどを用意し、ちょうちんに火を灯し、松明の迎え火を焚き、墓石にお参りして精霊様をお迎えして帰ります。また十五日夕方、ちょうちんに火を灯し、精霊様をお連れして墓に行き、迎えのときと同様にお供えをして、送り火を焚き極楽浄土へお送りします。

【水棚】
縁側のすみの庭に竹を四本立てソテツの葉などで囲んで棚を作ります。これを水棚といいます。バショウの幹を小さく刻んだものに御洗米やホウセンカ（エンガの花）などを混ぜた「みずのこ」を作り、水棚に供え、帰る場所のない無縁仏をここに迎え、拝みます。

【十五夜】
旧暦八月十五日に、ススキ、キイバナ、ケイトウ、松、萩などを花瓶に活け、お酒、餅、里芋、つのまき、季節の果物（柿・栗など）を月の見える場所に供え、仲秋の名月を祝います。男の子は綱引きや相撲などをし、女の子は弁当を持ち寄って月見を楽しみました。

【願成就】
十月には、各集落や神社で豊作豊漁を祝う願成就が行われます。これは、春の祭りで祈願した五穀豊穣が成就したことを感謝する祭りです。集落に伝承される郷土芸能が奉納される賑やかな日です。

おわりに

私たち、種子島の語り部「ぢろ（囲炉裏）の会」は発足してから四年になろうとしています。活動内容はまだまだ充実していませんが、今までに語ってきた民話や昔の子どもの遊び、又は昔の行事の再現などを一つにまとめてみようということになり、「むかし、あったちゅうわ」が出来上がりました。民話は各校区に因んだものを種子島の民話の中から選んでみました。会話だけでなく、すべてを種子島弁に替えるのが難しく、何度も何度も読み返しながら仕上げました。

わらべ唄は、ところによって歌詞の違うところもありますが、それもまた地域性があっていいと思います。年中行事は、今も続けられているもの、もうすでに無くなったものなどがありますが、昔を偲んでみてくだればうれしいです。

これから、あらゆる機会にこの小冊子を活用していただき、子どもたちの心に、ふるさとの民話や方言が残っていくことを、会員一同願っております。会員で知恵を出し、昔を思い出しながら、この冊子の編集にあたりましたが、お気づきの点がありましたら、ご遠慮なくご指摘ください。

最後にこの小冊子をまとめるにあたり、御協力くださいました方々に厚く御礼を申し上げます。

ありがとうございました。

ぢろの会一同

【参考文献】

「種子島の民話」　下野敏見　著　（一九六二）

「ふるさと歴史散歩」　西之表市教育委員会編（一九九六）

「なつかしいふるさとの方言集　遠々しゅうございます」　西之表市教育委員会編（一九九九）

「わたしたちの種子島（民俗編）」　西之表市教育委員会・西之表市文化財保護審議会編（一九八一）

種子島の民話・遊び集
『むかし、あったちゅうわ』二〇一一年三月発行

編集・発行　西之表市教育委員会
種子島の語り部「ぢろ（囲炉裏）の会」
〒八九九一・三一〇一
鹿児島県西之表市西之表七六一二番地
電話　〇九九七・二三・三二一五

イラスト　尾形之善

印　刷　（有）種子島新生社印刷
〒八九一・三一〇一
鹿児島県西之表市西之表一六七三六・一
電話　〇九九七・二二・〇四七六